

フクシマ核事故10年を迎えて

山崎知行

2011年3月11日から11年目がやってきます。ニュースの多くは地震津波からの復興が語られることが多いようですが、核事故による放射能汚染については忘れ去られてしまったかのようです。私はキリスト教会の団体から派遣される形で2012年から毎年福島へ、また仙台へ出かけて行って、放射能に悩まされる方々との交流を続けてきました。福島県の県民健康調査として甲状腺エコー検査が続けられていますが、そのまとめ方や解釈に多くの問題があって信頼性の薄い報告となっているのは情けないことです。放射能の害に関しては政府や福島県は当初から過小評価する方法が徹底して真実が知らされないままとなっています。一般の生活人にとって放射能の影響は考えられないと言われても納得のいかないモヤモヤが続いています。今や復興に竿を差すような言葉は村八分的取扱いになっていっているような感じがします。そのような中で放射能の影響を考えると3・11問題による関連死が福島県において突出し、中でも孤独死（自死）が非常に増えている事態があります。

2015年の直接死（地震や津波による）1604人に対し関連死1959人。それが2020年の直接死1605人に対し関連死2312人と深刻で、生活する人々にとってやり場のない憤り不安があまりにも多すぎ、だれからも顧みられない事態がこのような結果を生み出しているものと思われます。チェルノブイリの経験から学べば放射能の影響はこれから表に見える形で表れてくるように思えます。なお継続して注視していく必要があると考えます。

作者（榊原崇仁・さかきばらたかひと）紹介の一部

放射線の被害 その痕跡は 闇に葬られた

福島原発事故後の甲状腺被ばく測定、裏で仕組まれた歪曲と隠蔽の工作。

なぜ被災者は裏切られたのか――

執念の調査報道で明らかになった衝撃の新事実が、今ここに。

* 情報開示請求で得た膨大な文書からその関係者に取材をして行くという作者の執念が痛いほどわかりました。（松浦雅代）

